

# 「産業として使える ITの技術移転に力を入れたい」

同僚から「ズームレンズ（IT産業ニーズ）の目と、広角レンズ（国際協力）の目を備えた、なんでも写せる多機能ITカメラのような人」と評されるJICA国際協力専門員の井出博之さん。開発途上国の情報通信（IT）振興に力を注ぐ彼の笑顔の内側には、現地の人々への熱いシンパシーが流れていた。



photo by Asada Yuki

## ブリッジSEの育成で 途上国の産業振興を

一般にはあまりなじみのない「ブリッジSE」という言葉を存じだろつか。これは情報通信（IT）業界の和製英語で、日本企業が発注したソフトウェアを、日本との橋渡し役を務めながら本国で開発する、海外のシステムエンジニア（SE）のことをいう。

オフィスワークの職業に限られる開発途上国で、給料の高いソフトウェアエンジニアは花形職種だ。ただ、国内に仕事がないと、優秀なエンジニアは先進国に流出してしまう。「日本の政府開発援助（ODA）でブリッジSEを育て、途上国のIT人材の育成とIT産業の振興に貢献したい」。IT分野の国際協力専門員を務める井出博之さんは、このような思いを胸に、モンゴル、キルギスなど多くの国々で、カリキュラム作りや指導員の育成、ソフトウェア開発指導などを通じ、IT人材研修機関を立ち上げるプロジェクトやIT教育を普及させるプロジェクトに携わっている。



青年海外協力隊時代、バブアニューギニアで現地の人々と。当時は「IT」という用語はまだなかった。ものが段取り通りに進まない現地特有の時間の概念に業を煮やした時期もあったが、逆に日本社会の異常さに気付かされることもあった

大学を卒業後、SEとして外資系IT企業で働いていた井出さんは、残業続きで昼も夜もない生活を送っていた。この業界では、できるだけ短い期間と少ない費用で、高品質のソフトウェアを顧客に提供することが求められる。特に日本ではその傾向が強く、納品先のニーズが第一であり、エンジニアはそれに応えるため最後まで身を削らなければならぬ。今、日本には、希望を胸に日本に留学し、晴れてIT企業に就職しても、そう

した「非人間的」とも言える働き方をさせられている途上国出身のSEは少なくない。冒頭の井出さんの思いの背景には、そんな現実がある。「どの国の人も、自分の国から離れたくないという気持ちが心の底にあると思います。求めるIT関係の仕事があれば自国にとどまるし、さらにブリッジSEが仕事を先進国から持つてくるような事例が増えれば、おのずと国内の技術者や産業も育ち、その国の経済・社会にも貢献で

きるようになる」

また途上国では、いまだにさまざまな職業でコネがないと就職の際に不利だったり、正当な給料が支払われないなど、労働環境に閉塞感があるという。しかし、プログラミングなどのIT技術は、そのような環境でも、確実に社会に役立つスキルとして努力した人に成功をもたらすものだ。「まじめに取り組んでいれば大成できる、という若者の夢を育て、社会の閉塞感を破りたい。人材が育ち、長期的にITがその国の産業振興策の一つとして活性化すれば」と願う。

## スタートラインに 立つまでは

そんな井出さんが、今、もう一つ関心を抱いているのが、途上国でのインターネットの普及だ。2006年、井出さんは農村におけるITの可能性を探るため、アフリカ6カ国を視察して回った。重点的に見たのは、国連開発計画（UNDP）や米国際開発庁（USAID）などが設置した「テレセンター」と呼ばれる施設だ。テレセンターにはインターネットに接続し

Ide Hiroyuki

JICA国際協力専門員 **井出 博之**



たパソコンが置かれ、トレーニングを受けたスタッフが常駐している。都市部から離れ、情報から置き去りにされてきた農村がインターネットと出会い、人々の意識や暮らしが変わろうとしていた。

「ウガンダのある村の農民は仲買人にピーナツを売っていたのですが、どうもいつも買いたたかれる。まず、ネットで相場を知り、高く買ってくれそうなるの仲買人がいることが分かった。さらに調べたら、ピーナツバターに加工すれば付加価値が高くなることも知り、作り方をインターネットで調べて売ると収益が上がった。テレセンターに行くく情報を得られるとこのことで農民が集まってくるんですね。このように、インターネットは下からのエンパワーメント（能力強化）に使えるんです」

「大切なのは、スタートラインを一緒にすること。これは、井出さんが学生時代の障害者介助のボランティアサークル活動で身に付けた考え方で、国際協力にも通じるという。」

「障害を持つ人も、途上国の人たちも、皆と同じスタートラインに立つまでは手を差し伸べる。」



内戦時代に対立していたムスリム、セルビア人、クロアチア人の3民族の高校生が合同でIT教育を受け、JICAの民族融和のためのプロジェクトがボスニア・ヘルツェゴビナで実施された。プロジェクトの立ち上げにかかわった井出さんも、3民族の教員に指導を行った

そこに立つまでに決して格差があつてはならない。その先どうするかは自分で決めればよい」

ただ、井出さんは「確かにインターネットはインパクトがある。でもそこには負の作用も必ず生まれてくる」とクギを刺す。「ウガンダでは中高生が学費欲しさに援助交際に行くことが問題になっていました。インターネットが普及すると日本と同じ

ような出会い系サイトができて問題が深刻化する可能性もある」

インターネットはもろ刃の剣。負のインパクトを軽減するためには、情報モラルの教育など人々が自分を守る力を付けていく方法も同時に考えていかねばならない。また、今は農村にテレセンターが維持できるだけの収入がなく、運営は援助機関頼みのテレセンターだが、創意工

夫で運営費をねん出し、なんとか持続可能な体制が構築されるよう、JICAが協力できれば。井出さんは日々、アイデアを巡らせている。

### IT技術で途上国の人々の生活を変えたい

彼が国際協力の世界に足を踏み入れたのは、IT企業に在職

中、青年海外協力隊に参加したことがきっかけだった。現職参加制度を利用して赴いたパプアニューギニアでは、配属先のポ

ートモレスビー大学とオーストラリアのメルボルン大学をインターネットでつなぐ作業に取り組み傍ら、学生たちにワープロ

を伝授した。帰国後、ITエンジニアとして企業に戻り、携帯電話を小型化するプロジェクトなどにかかわるが、何かが面白くなかった。「IT技術の格差が、途上国をますます不利な立場に追いやっている。自分の持つ技術を活用し、そこに住む人々の生活が良くなるようにできないか」。そんな思いがくすぶっていた。そして応募資格の上限となる35歳のときに、JICAジュニア専門員に応募。3年後には国際協力専門員のポストに就いた。企業に勤めていたころと比べて収入は減ったが、今素直にこの道を選んで良かったと思っている。

けにはいけない。井出さんは、暇を見つけては外部のセミナーに参加したり資格試験を受けたりして、自分を磨くことを忘れないようにしている。「育成してきた優秀な人材が、良い待遇を求めてあっさり流出してしまうときはさすがに落ち込む」という井出さん。それは出入りの激しいこの業界ではある程度避けられないことでもある。それでも、最近「ジュニア専門員時代に立ち上げたモンゴルの日本人材開発センターのITコースの卒業生が、日本向けソフトウェアの開発に従事している」「パソコンの導入支援を行った学校の卒業生たちのITリテラシーが、とても高いと評判になっていて」となどの知らせが届き始めた。「駆け出し専門員の私にはまだまだそうした事例が少ない」と謙遜するが、スタートラインを踏み出した途上国の人々の活躍は、ITの花を途上国で咲かせようと日々奮闘する井出さんにとって、何よりもうれしいニュースに違いない。



2006年、「JICA・北海道大学連携国際協力セミナー」で、国際協力に関心を持つ後輩たちに話をする井出さん。「民間のSE時代、周りに北大出身者はいなかったけれど、JICAに来たらたくさん会えますよ。何か通じるものがあるんでしょうね(笑)」

JICAに移ってからの課題は、自分のスキルをどのように維持・向上させるかだ。IT分野の専門員は、小中学生のITリテラシー向上から高度エンジニアの育成、システム開発、果てはIT産業振興まで、同時並行的に対応する必要がある。日進月歩の技術を、民間企業のように仕事を通じて習得するわ

情報やコンピューターを扱う能力のこと。



ジュニア専門員時代は専門家としてモンゴルに赴任した。地方の中学校を回って教員の訓練をするほか、首都にあるモンゴル日本人材開発センターにITエンジニアの育成コースを設置した

ITエンジニアという、努力次第で夢をかなえられる職業を通じ、途上国の若者を覆う社会の閉塞感を破りたい。

Ide Hiroyuki

いで・ひろゆき JICA国際協力専門員(情報通信)、1965年神奈川県出身。北海道工学部精密工学科卒業。日本アイ・ピー・エム(株)在職中、93年に青年海外協力隊に参加。帰国後、日本オラクル(株)などでソフトウェア開発に携わる。2000年にJICAジュニア専門員になり、モンゴル教育省でITアドバイザーを務める。04年から現職。